夜兎ノ跳ネル白イ月

紅葉or紅蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夜兎ノ跳ネル白イ月

【Ｎコード】
Ｎ６０６８Ｘ

【作者名】
紅葉ｏｒ紅蓮

【あらすじ】
アレン・ウォーカーは死し、宇宙最強の戦闘民族『夜兎族』、「神乃」に生まれ変わる。チャイナ服に身を包み、番傘を携えた彼は、消えた兄妹を探すため、地球へ訪れる…。しかし、江戸に『彼ら』が現れたことで事態は急転する。『彼ら』はあの「十字架」を掲げた者たちで…

再会（前書き）

初めまして、紅葉ｏｒ紅蓮と申します。

はじめに、この小説はＤ灰×銀魂の混合小説となっております。

・Ｄ灰、または銀魂が嫌い
・転生なんて最悪
・神楽の兄！？意味分からない
・ＢＬ、ＧＬを読みにきた

以上の項目に当てはまる方はお帰りください（＾＾）

まず、この小説の主人公は銀時ではなくアレンです。

そしてアレン死んで生まれ変わってます。

ＯＫですか？いいんですか？？

それでも大丈夫！という方は、スクロールして本文へ！！

では、どうぞ！

再会

路地裏で起きたそれは一瞬だった。

「て、めぇ…天人(あまんと)……！？ただのガキじゃなかったのか…」

一瞬で地に伏した男が、呻き、そう吐き捨てる。

三つ編みで結った桃色の髪を揺らした少年は、青の眼を伏せて言った。

「…ごめんなさい、探してる人がいるんです。貴方達に構っている暇はありません」

少年はそう静かに言うと、倒れている男たちの横を通り過ぎた。

＊

つめたい、ゆきのふるよる。

みちにまよってかえれなくなったわたしは、みちにしゃがんでないていた。

「うっ…ぐす…ひっく…」

ずっとさむいなかなきつづけていたら、ふいにくびもとがあたたかくなった。

上をむくと、ももいろのみつあみが2つ。

ふたりははずんだ息を静めながら、わたしに…私に笑いかけた。

『やっと見つけた。随分探したんだからな』

「か…む、い」

『さ、一緒に帰ろう？』

「かん…の」

うん…

2人が差し伸べてくれた手に、私も手を伸ばす。

兄達は笑い、私の手をやさしく握った…

・・・・・・

・・・・・

・・・・

・・

・

「…随分昔の夢を見たアルな」

万事屋（よろずや）の天井を見上げながら神楽がポツリと呟くと、ソファーに腰掛けていた万事屋のオーナー坂田銀時が「あ゛ー？」と声を上げる。

「神楽…それは死亡フラグ踏んだ奴が言う台詞だぞ。オメーは爺婆になっちまったのかァ？」

「銀ちゃん、死亡フラグ踏むのは爺婆だけじゃないアル。もっとアホな奴とかサドとかサドとかサドとか」

「…それじゃ沖田くん死ぬじゃん」

「あいつは私に突っかかってくる時点でもう死んでるアル。あれヨ、『お前はすでに死んでいる』」

「何言ってんだァァァァァ！！！」

神楽と銀時を渾身の突っ込みでとめたのは、神楽と同じく万事屋の従業員である眼鏡である。

「オォォォォイ！！眼鏡じゃねぇよ！！せめてルビくらい入れろよ作者ァァァ！！」

「うっせーんだヨ駄眼鏡が。私こーいう男嫌いなんだよネ」

「んだとこのアマァァァァァ！！？」

神楽の暴言に叫ぶ眼鏡及び志村新八。これからは彼のことを眼鏡と

表示するので、皆さんよろしくね☆

「☆じゃねェェェェェ！！！ふざけんなよ、マジふざけんなよ作者ァァ！！」

「オイ眼鏡、うるせーぞ。あんましつこいとこれからこの小説に出られなくなんぞ」

「Σマジでか！！」

銀時は新八にそう諭すと、また手にしているジャンプを読み始める。

神楽は炊飯ジャーに入っていた飯を食べ終えると、巨大宇宙生物、定春の散歩に行こうと立ち上がった。が、散歩に行くことは叶わなかった。

ピーンポーン

「あ、お客さんですかね。はーい！」

返事をして新八が玄関に向かう。そして扉を開き、固まった。

番傘から覗いた桃色の三つ編み。体に纏ったチャイナ服。

…万事屋の空気が張り詰める。男が口を開いたと同時に銀時が駆け出した。

「あの…」

言いかけた男は突然飛んできた木刀に眼を丸くし、瞬時にキッと眼を鋭くすると木刀を足で弾き飛ばした。

瞬時に宙を舞った木刀の柄を掴み、突きを繰り出す。…が、相手の顔を見て固まった。

「…あら、人違い？」

「……誰と間違えたら、こんな事態になるんです？」

冷や汗を流した銀時がそう呟くと、男は低くそう言った。声が少し高い。少年だろうか。

銀時はすばやく正座すると、深く頭を下げ土下座をした。

「すいませんんん！！ちょっと知り合いに貴方様に似た厄介なのがいるもんで、特徴がそっくりだったんでェェェェ！！」

「ホントすいませんんん！！」

「Σ早！？土下座すんの二人とも早！！？

…本当申し訳ありません、ウチのオーナーが……？」

新八が神楽と銀時に突っ込み、少年に謝る。

しかし、少年は新八の方に顔は向けず、ある一点を驚いたように見ていた。

その視線の先には…

（…神楽ちゃん？）

やはり同じ夜兎だし、知り合いだった？あ、でも神楽ちゃんのお父さん有名だし…

そう考えていると、少年が呟いた。恐る恐る、確かめるように。

「…神楽…？」

名を呼ばれた神楽が不思議そうに顔を上げる。そして眼をまん丸にし、言った。

「…か、神乃（かんの）…？」

神楽がそう呟き、銀時と新八の視線が少年に向く。少年は傘を畳み、顔を上げた。

神楽と同じ色の髪を三つ編みにし、男にしては大きい青い眼を彼らに向ける。左目の赤い傷が、白い肌に映えていた。

「神楽の兄の神乃（かんの）です。神楽がお世話になってます」

そう微笑んで言った少年…神乃に、銀時と新八は驚きの叫びを上げ

る。

「「え…ええエエエエエエ！！？？」」

再会（後書き）

アレン＝神乃

です。名前が思いつかなくて…！

もうこの時点で駄文ですけど、これからよろしくお願いします！！

経緯と十字架

「んで…アンタは…？」

「はい、神楽の兄の神乃（かんの）と申します。
神楽がお世話になっているみたいで…すいません」

少年――――神乃はそう言いペコリと頭を下げた。あの神楽の血の繋がった兄妹とは思えない行動に、銀時と新八は目を丸くする。神楽は二人を睨み付けた。

「銀ちゃん、新八……何アルか、その『これが神楽（コイツ）の兄弟！？全然似てねー…』みたいな目は。私と神乃は完璧な血の繋がった兄妹アル。首の骨ボキっと殺られたいアルか」

「いえいえいえいえそんなことは全然思っておりませんよ神楽様ァァァァァァ！？」

「そそそそそうだよ神楽ちゃん！！むしろ僕ら『お似合いだなー』

と思ってたんだよ！！」

「何言ってるアルか。そんなの当たり前ダロ」

冷や汗を滝のように流しながらそう言う銀時達に、神楽はフン、と偉そうな顔をする。

神乃は苦笑を零した。

そのとき、新八が口を開く。

「あの、神乃さん……その…傷跡、」

「…あ、これですか？」

恐る恐る新八が指差したのは神乃の左のおでこから頬まで架けた赤い傷。よく見てみると、星の形にも見える。

それを慈しむように撫で、神乃は静かに微笑む。

「…生まれた時から、あったものなんです」

「神乃、そんなの嘘アル。神乃は小さいころから他の夜兎に虐められてたから、そのときにつけられた傷なんだロ！？」

神乃の言った言葉に神楽はそう叫ぶ。肩で息をしている神楽に神乃は顔を向け、微笑んだ。

「そんなんじゃないよ、神楽。それにこの傷は…

――――とても大切な人に、つけられた様な気がするから」

目を閉じながらそう言う神乃に、銀時は何も言えなかった。何か、自分たちの入ってはいけない場所だと…そう、感じたから。

神乃は傷を撫でながら、小さくぽつりと、自分に言い聞かすように、

言った。

「この傷のおかげで、神乃(僕)というものが存在しているとしか思えない。この傷がなければ、僕はいなかったかもしれないんだ」

「…ッ」

その言葉に神楽は下唇をかみ締める。

とっさに新八は話を話題を変えた。

「そ、それで神乃さんはどうして地球に？」

「あ、実は離れ離れになった兄妹を探していまして。まあ特に意味はなかったんですけど、このまま星に残ってるのも嫌で。

…それで当てずっぽうで地球に来てみたんですけど、そこでいきな

り人間(ひと)に絡まれまして。軽くボコボコにしてその後公園に行ったら、子供達が回りに集まってきて、「神楽ちゃんの男バージョン」と言ってたから神楽の場所を聞いて、ここまできたんです。…かなり時間かかりましたけどね」

「ああ。神乃は超極度の方向音痴だったアルな。仕方ないアル、これからは私がいるから大丈夫ヨ」

「え、本当神楽!?」

「え、何でウチに住むこと前提になってんの?ねぇちょっと!?」

ここまでの経緯を説明し、ぐったりとした様子を見せる神乃に、思い出したように神楽が言う。

銀時は二人の会話の先を想像して顔を青くした。

＊

「う…ぅ、ん」

一つ苦しそうに呻き、ゆっくりと起き上がる。

辺りを見回し、自分と同じように地面に転がっている仲間を見て急いで駆け寄る。

体を抱き寄せ、揺さぶる。

「ラビ！！？神田！！大丈夫！！？」

「う〝…」

「あ〝ぁ…？」

揺さぶられたことで目をさました青年達は辺りを見回し、呆然とした顔をする。

少女が不安そうな声で訊く。

「ここ…どこだか分かる？」

「いや…全然分からねぇさ。つーか何アレ、犬？犬が服着て歩いてるんデスケド」

「何なんだよ…」

呻いた3人の着ている服には、同じ十字架が刻まれている。

そんな彼らに、声をかけるものが2人。

「オイ、テメェら何者だ」

「あ？」

3人が顔を上げると、そこには黒髪でタバコを吸っている男が睨み付けていた。

男は刀の鍔を指で押し上げる。

「大体そこにいるポニーテールの男は刀持ってんじゃねェか。テメェら攘夷浪士か？」

「…攘夷浪士？」

「んだよソレ」

聞きなれない単語に思わずつぶやく彼らに訝しげに眉をひそめる。
そんな男の背に、一陣の風が吹きぬけた。

ズゴォォォォン！！

「Σうおおおおおお！！？」

男があわててその場を飛びのく。と、先ほど男が立っていた場所に刀がめり込んだ。

刀を持った栗色の髪の美少年が、「チッ」と舌打ちをする。それに黒髪の男が吼える。

「テメェ総悟！！まッッた俺を狙いやがって！その余力を仕事に回せ仕事に！！」

「え、だから今やってんでしょ？『土方殺し』っていう仕事を」

「イヤそれ仕事じゃないからね！！？俺を抹殺するための策略だよね！！？」

「何言ってんですかィ。あの有名な鬼の復調あ間違えた副長がそんなこと気にするから市民どもから嫌われるんですぜ。どーすんでさァ」

「いや、それほぼお前の所為だけど！？」

目の前で繰り広げられる口論（？）に唖然とする3人。しかし、理由はそれだけではなかった。

3人のうちの一人、赤毛で眼帯をしている青年、ラビがあんぐりと口をあける。

その隣で呆然としていた緑がかった黒髪の美少女、リナリー・リーが、ぽつりと、言葉を零した。

「ら、ラビと同じ声…」

「「あ？」」

黒服を着た二人組…『土方』と『総悟』が同時に顔を向ける。

一人残されたポニーテールの青年、神田ユウは「チッ」と舌打ちをした。

経緯と十字架（後書き）

お久しぶりです！！遅れてしまってスイマセンしかも短いですね！！

黒の教団組を登場させました！！一回やってみたかったんですよ声優ネタ。

「同じ声…！？」って言わせたかったんですよスイマセン！！

これからも応援よろしくお願いします！！

迷い込んだ悪魔払師（前書き）

※ちょっとＢＬＥ〇ＣＨネタあります。
わからない人、ごめんなさい。

迷い込んだ悪魔払師

「なるほど、テメェらは先程まで異国（ロンドン）にいて、歌舞伎町（ここ）にはいなかったと…」

そう低く告げた男、土方十四郎に、うんうんと頷く黒髪の美少女と赤髪の青年。リナリーとラビである。

「そうか…」

土方はそう呟き、額にビキリと深く青筋を浮かべた。

「んな話…

信じられる訳ねェだろぉがァァァァァァァァァ！！！！！」

卓袱台があれば料理ごとひっくり返しそうな勢いで叫ぶ。

ラビとリナリーはそれにビクリと肩を震わせる。神田はチッと大きく舌打ちをした。

「で、でも本当なんです！！私達も何がなんだか…」

「…あ、そういえば俺らここに来る前何やってたっけ」

「『イノセンス回収』と『アレン探し』だろ」

ラビの疑問に神田が答える。アレン（気に食わないやつ）を思い出したからか、また舌打ちをした。

土方は聞きなれぬ言葉に眉を潜め、障子に寄りかかって話を聞いていた沖田総悟は頭に疑問符を浮かべた。

「『イノセンス』だぁ…？」

「モヤシなんか探してどうするんですかィ」

「『神の結晶』と呼ばれる物質だ。ほっとくと人が死ぬな」

「人が死ぬ！？なんつー物質だ！？」

さらっとそう言った神田に土方が掴み掛かりそうになるが、ラビが「あぁそーじゃなくて！！」と声を上げたことで何とか踏みとどまる。

「まぁユウの言ったこともあながち間違ってねーケドぉ…確かに放っておくと危ないさね。いつここに（来れるかわかんねーけど）ＡＫＵＭＡ（アクマ）がくるかわかんねーし、馬鹿な人間の手に渡ったら変に作動するし…」

「悪魔？」

「ＡＫＵＭＡはそういう人間の思想のキャラクターじゃなくて、『千年伯爵』が「魂」「悲劇」「機械」を材料に作る悪性兵器のことです」

リナリーがそう説明すると、土方は表情を引き締め、「詳しく聞かせてくれ」と説明を要求した。

＊

大体の説明が終わると、エクソシスト組はフゥーと息を吐き出す。

説明を受けた土方の頬に冷や汗が流れた。

（ＡＫＵＭＡ――――――コイツらの言ってることが本当なら、最近起きている事件は全部ＡＫＵＭＡ（それ）の仕業！？いや間違いねえ、天人はともかく死体から心臓だけ抜き取ったり灰にするまで撃ちまくるなんて人間技じゃねぇ…コイツらを入隊（いれ）れば……被害がおさまｒ「アクマって虚（ホロウ）みたいな設定の敵キャラですねィ土方さん」…）

「オマエなんなの！？空気読めよ総悟！！」

「えー」

「『えー』じゃねェ！？ホントなんなの！？俺への虐めなのそれは！？」

「それ以外になにがあるってんです。つーかマジで死んでくれよ土方」

毒を吐く沖田に頭を抱える土方。それをポカンとした目で見ているエクソシスト（神田除く）に沖田は（土方を完全無視して）顔を向け、問うた。

「んで、「モヤシを探してる」っつーのはどういう了見でィ。モヤシなら真選組（ここ）にもありやすが」

尋ねたと同時に神田が何かを放り投げる。それをキャッチし、沖田は手の中に納まった硝子の中の写真をまじまじと見つめる。

金色の鳥？と一緒に微笑んでいる白髪の少年。左目の傷が、白い肌に映えている。

硝子には「Ａｌｌｅｎ　Ｗａｌｋｅｒ」と彫られている。

「……」

「…この子を探してるの…知ってる？」

「…コイツ、チャイナ兄じゃね？」

「「「「……は？」」」」

沖田の呟いた言葉に、土方を含む全員が呆けた声を上げる。

土方は尋ねた。

「オイどーいうことだ総悟？チャイナに兄なんｔ「さっき会ったんでさァ。チャイナと違って礼儀正しい奴でしたよ」マジでか」

「ただこんな白髪じゃねェなァー」と呟くと、沖田はよし、と呟いてエクソシストに向き直った。

「いいぜ、探すの、手伝ってやらァ」

「え、オイ総g」

「コイツはしらねぇけど、そっくりさんなら知ってるし…つーかコイツマジそっくりだな。傷とか顔とかそのまんま」

「s」

「この真選組副長の沖田様がお前らに手ェ貸してやらァ」

「副長は俺だァァァァァァァ！！！！」

台詞を最後まで言わせてもらえず、副長の座まで取られそうになった哀れな土方は渾身の叫びをあげる。

沖田はそんな土方を一瞥し、ケロリと言った。

「え、別に一文字たりとも間違ってませんぜ？土方さんはここで死ぬんですから」

すらりと刀を抜き、にこりと笑う。

土方の額に、先程とは違う意味の冷や汗が流れた。

沖田の目が怪しく輝く。

「死ねェ土方ァァァァァァァァァァァァ！！！」

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

ドカァァァァァァァァァァァァァァァァァァァン…

エクソシスト組がつかんだことは２つ。

「アレン」のソックリさんがいることと、

沖田とラビの似ているところは声だけで、性格はまるっきり違うということである。

１つのバズーカの音と誰かの悲鳴が、屯所内に響いた。

迷い込んだ悪魔払師（後書き）

アレ、近藤さんは？と思った方多いと思います。

ごめんなさい、忘れてました。まぁ出張とかお妙をストーキング中とかそんなんだと思ってください。

更新速度が相変わらず鈍足ですが、応援よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6068x/

夜兎ノ跳ネル白イ月

2011年12月28日11時49分発行